一須賀古墳群の外来系土器

福岡澄男

一

一須賀古墳群は、聖徳太子陵や推古天皇陵が所在する磯長谷の、南側山丘上に分布する古墳群で、南河内郡太子町と河南町とにまたがって、横穴式石室墳を主とする一〇〇基以上の古墳が築造されている。

一九六七年、この古墳群の石室が次々に破壊されるという事件があって新聞紙上をにぎわしたことは、いまだ記憶に新しいが、翌年には現阪南ネオポリス宅地造成計画に伴なう事前の調査が、大阪府教育委員会によって実施され、木棺直葬墳や横穴式石室墳の他に、弥生時代の集落遺跡や須恵器窯も発掘された。

その後保存の方向にむかい、古墳の継続的な調査をみたのち、史跡公園としての環境整備が現在進行中である。

二

図示した土器は、一九六八年の発掘調査の際に出土したもので、大阪府教育委員会刊行の概要報告書に写真が掲載されている。(『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会)

図の1は一一号古墳から出土した土師質土器で、口径一四・五㎝、器高一三・二㎝、体部の中程よりやや上に最大径をもち一五㎝を測る。口縁部は「く」字状に短く外反する。特徴的なのは平底をなすことと、体部外面全体にわたって、平行の叩目条痕を残すことである。

一一号古墳は、横穴式石室墳で、石室内からは馬具、装身具、須恵、土師器など多数にのぼる副葬遺物を出土し、須恵器を検討した結果、六世紀前半に築造され、七世紀前半まで追葬したものと、結論されている。したがって、この土器が特に伝世されたものでない限り、その製作年代を六世紀前半から七世紀前半の間に置くことができるであろう。しかし、同時期および前後の時期の土師器と比較した場合、一見その差は歴然たるものがある。関東地方特に千葉県下の平安時代土師器に類似例を求めうるかのようであるが、よく比べればその異質のものであることが判然とするであろう。

2はやはり横穴式石室墳である二七号古墳から出土した、土師質の甕形土器というべき器形をした土器である。時期は伴出土器からみて、六世紀に求めうる。この土器の特徴は、平底風の底部と、体部外面にみる縄席文である。縄目は荒く、条の方向は体部中程を境にして、上半部は縦方向、下半部は斜横となっている。このような諸特徴も、およそ土師器には見られないものである。

1・2の土器との親縁関係を他に求めるとすれば、朝鮮半島における三国時代の土器のうちに最もよく求め得るであろう。わが国の古墳時代に須恵器と土師器が併用されたように、朝鮮の三国時代においても、硬質の陶質土器と軟質の埴質土器や瓦質土器がある(藤沢一夫「百済の土器陶器」河出・世界陶磁全集)が、軟質土器のうちに本二例のような器形と技法になる土器を捜すことは、それほど困難なことではない。

三

五世紀代を中心として、朝鮮半島から各種の新しい技術や知識がわが国に伝えられたこと、そして須恵器作りもそのうちの一つであることはよく知られているが、実はこの時期、もう一つの土器である土師器も多大の影響を受けている。それは製作技術面におけるよりもむしろ、甑・長甕・把手付ナベ等々、彼地の軟質土器の流れを受けた新しい器形の出現盛行にみられるように、機能面においてより顕著なものがある。それは竈が盛行する事実などと密切な一連の関係にある、新しい生活文化の受けいれによるものであった。それを証するものとして、大阪府下出土の縄席文や叩き目をもつ、三国時代軟質土器系土器は、五世紀代に集中し、初期須恵器に伴って出土している。

そうした点からすれば、本例は貴重な例ともいえる。それはこのような渡来系土器は、畿内では弥生時代にも若干知られているが、先述のごとく、五世紀代に集中的にみられるという状態のなかにあって、六世紀代のものと考えうる数少い例であるからである。

また、この土器を副葬していた古墳の被葬者と渡来氏族との関係如何も問題となる点であろう。一般的には、渡来系文物を副葬しているから即被葬者が渡来氏族であるとするのは飛躍した考えかたであるだろう。しかし一須賀古墳群と渡来系氏族との関係を説いた水野正好氏の研究(水野正好「漢人系氏族の古墳をめぐって」アジア文化八―二)や、最古型式の須恵器を焼成した一須賀二号窯開窯にかかわる、外来技術者の伝統を次く地であることを考慮した場合、該古墳被葬者をして渡来氏族とすることの蓋然性は高いというべきであろう。

摂河泉文化資料 第10号 1978. 北村文庫会

近畿地方における三国時代朝鮮系土器の流入とその影響

(財)大阪文化財センター 福岡澄男

1. 三国時代朝鮮系の土器

近畿地方や九州を中心に、三国時代の朝鮮半島における陶質土器や軟質土器に酷似する土器が出土する。

藤沢一夫氏や堅田直氏らは、この種の土器に対し渡式系土器、韓式土器、渡韓式土器等と呼び研究を進めてこられた。ここで三国時代朝鮮系土器と呼ぶものは、そうした名称で呼ばれるものであり、新たな名称を提唱するものではない。

近畿地方では、近年この種土器の出土例が増加し、阿部嗣治氏や堅田直氏、尾谷雅彦氏によって、出土地の集成、研究が行われている。筆者も諸先生方の研究の驥尾に付して、以前からこの種の土器のもつ問題に興味をいだいてきた者であり、研究会等で両三度の発表の機会も得た。

今回は、この種土器のうち酸化炎焼成軟(土師)質のもの、および他の文物、事象とのかかわりについて、筆者なりに興味をもつ点のいくつかについて見とおしを述べさせていただき、御批判を仰ぎたいと思う。

2. 年代的、地理的分布の傾向と遺跡での出土傾向

近畿地方を中心とする地域においては、弥生時代(後期)以降6世紀代までみられるが、なかでも初期須恵器と併行する5世紀代に最も集中する。

出土遺跡については、堅田直氏の研究(「韓半島伝来の叩目文土器(韓式系土器)について」日・韓古代文化の流れ1982)に一覧表が掲載されているこれ以外に愛知県の例など若干があるが、現在のところ地理的分布の中心は堅田氏が指摘されるように河内平野である。

つまり5世紀代の河内に最も集中してみられるということであり、このことには大きな意味がある。

次に近畿地方では若干例を除いて集落遺跡から出土しているが、多くの場合一遺跡からの出土点数はごくわずかである。最近、比較的まとまった点数を出土する例も知られてきており、こうした遺跡内あるいは遺跡毎の出土傾向とその差は、土器分布の背景を考える上で重要なことと思われる。

3. 土師器変容とのかかわり

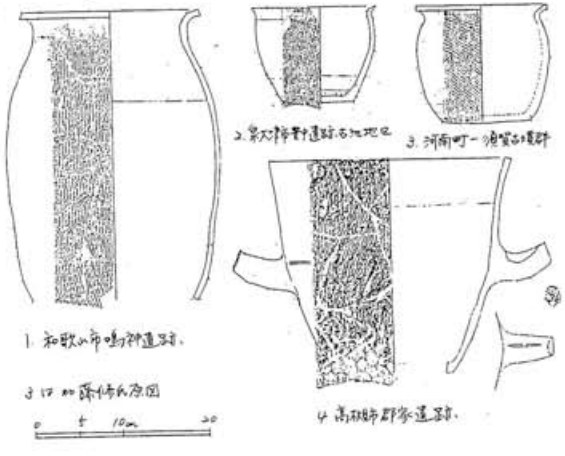
周知のように、古墳時代の土師器は船橋Ⅱ式ないしは後続型式の時点で器種、器形の上に大きな変化をみせる。甕の長胴化、把手付の甑や鍋の出現等が顕著な現象であり、新しい器種は後に受けつがれていく。

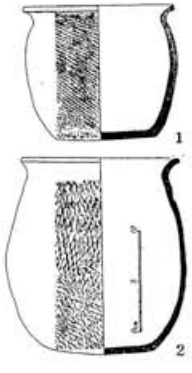
この変化の要因について、この時期に生産開始された須恵器の影響から説かれることもあるが、朝鮮系軟質土器の影響をより多く受けていることは明らかである。

興味深いことは、新器種はその後一貫して受けついでいくが、土器つくりの技法は影響を受けないか、あるいは受けてもすぐに土師器にみられる刷毛目技法に還っていることである。この点は土師器生産の問題とも関係している。

また土師器の変化にあわせるように、近畿地方では作りつけのカマドが普及しはじめ、やがて地方へ流布していくが、両者が有機的に結びついていることは確実である。

5世紀代の河内を中心に分布する朝鮮系の土器が、文献史料にも散見する彼地から渡来した人々とその後裔達の手になるものであることが殆んど疑いのない事実だとすれば、時間的、地理的分布や遺跡での出土傾向は、それらの人々の当地でのあり方をものがたっているといえようし、渡来系氏族の地方への動きをうかがう手がかりにもなると思われる。なお詳細は別稿で発表を予定している。





1.は加藤修原図

第1回 近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料 1983.